

# 妖怪

馬場 真理子

(小池長之「妖怪」『宗教学辞典』1973年版に続けて)

【日本における妖怪研究】 従来の妖怪研究を担ってきたのは、主に民俗学である。妖怪は民間信仰研究の中で取り上げられてきたが、その位置づけについては必ずしも明確でない。例えば、幽霊と妖怪を区別する場合もあれば、重なり合う概念として扱う場合もある。後述する神と妖怪の関係についても同様である。妖怪概念の位置は、各研究の目的や対象によって常に変動している。

妖怪に関する研究史を追う際には、二つの点に留意せねばならない。第一に、「妖怪」という言葉の曖昧さである。この言葉の最古の用例は、後漢で編纂された『漢書』『循吏伝』の中の「久之宮中数有妖怪王以問遂（やがて王宮の中でしばしば妖怪なことがおこったので、王はこれを遂に問うた）」という箇所にもみられ、ここでの妖怪は怪奇現象・異常現象を指しているものと考えられている。この語意は日本にもそのまま輸入されたようで、日本最古の用例がみられる『続日本紀』の宝亀八年（西暦777）2月19日の記事では「辛未、大祓す。宮中に頻に妖怪有るが為なり。」とある。しかしその後、江戸時代の絵草子で「化け物」や「百鬼夜行」といった類義語が頻繁に用いられていたことからもうかがえるように、妖怪は口語として普及していなかったと考えられる。妖怪という言葉が学術用語として定着するのは、明治の仏教哲学者である井上円了の「妖怪学」によるところが大きい。彼の研究対象である妖怪とは、古今東西の不思議な現象すべてを指している。その指示範囲は現代の一般的な場合よりもはるかに広く、幽霊や超常現象はもちろん、手品や精神障害、奇妙な食べ合わせに至るまで含まれている。井上は、そうした妖怪とされる現象を合理的に解釈し、迷信として切り捨てることで、日本人の啓蒙を図った。続いて妖怪を研究したのは、風俗史家の江馬務である。歴史学的に検証する価値のあるものとして妖怪を捉えた江馬は、妖怪の出現理由や形態的特徴を分類し、その変遷を辿った。彼の研究対象は井上よりも狭く、形を有する妖怪が中心に扱われている。また、民俗学者の柳田國男は、人々の畏怖の対象として妖怪を研究した。このように、妖怪研究を担ってきたとされる研究者の間でも妖怪の定義や捉え方は定まっておらず、語の包括する範囲は必ずしも一致していない。

第二に、妖怪研究に二つの面があることに注意する必要がある。すなわち、民間伝承の中でリアリティをもって受け入れられてきた妖怪を主に扱う研究と、文学や絵画の中で描かれてきたフィクションとしての妖怪を主に扱う研究である。現代に至るまで妖怪研究の大部分を担ってきた日本民俗学は、前者に属すると言える。柳田は、民間伝承における妖怪を研究することによって日本人の精神性や信仰を明らかにしようとした。『妖怪談義』の中で彼は、妖怪研究の目的について「通常人の人生観、分けても信仰の推移を窺ひ知るに在つた」としている。彼の提示した幽

霊と妖怪——柳田は「オバケ」という言葉を用いている——の区別をみれば、彼の妖怪論をうかがい知ることができよう。柳田によれば、幽霊がどこにでも出現し、その相手が決まっており、「丑みつの鐘が陰にこもつて響く頃」に現れるのに対し、妖怪は、出現する場所が決まっており、相手を選ばず、宵や暁といった薄明かりの時間帯に現れる。妖怪の定義は研究者ごとに異なると言っても過言ではないため、柳田の仮説にあてはまらない例があると主張してこれを否定する研究者も多い。しかし、全国から妖怪に関する伝承が集められるきっかけをつくったという点で、柳田の研究が大きな役割を果たしたことは疑いえない。

柳田の妖怪研究において最も注目すべきは、いわゆる零落説である。これは妖怪を神への信仰の零落したものとみなす仮説であり、柳田後の妖怪研究は長らくこの支配下にあった。しかし1980年代になると、柳田の零落説に追随しない、新たな妖怪研究の試みが始められた。民俗学者の小松和彦は柳田の零落説を否定し、祀られる超自然的存在が神であり、祀られていない超自然的存在が妖怪であるから、両者の区別は流動的かつ可変的であると主張する。

このように民間伝承の中の妖怪を主に扱ってきた民俗学に対し、文学研究や美術史学における妖怪研究は多くの場合、フィクションとしての妖怪を研究対象としてきた。しかしながら、妖怪研究が二つの側面をもつからといって、研究対象である妖怪をも安易に二分するべきではあるまい。リアリティをもつ妖怪とフィクションとしての妖怪は、明確に分けうるものではない。柳田は前者のみを妖怪として認めていたが、それは日本固有の文化を追求する民俗学の目的に沿った見方であって、必ずしも自明視してよいものではないであろう。したがって、妖怪の二つの面の関係性や歴史の変遷に注意するだけでなく、そもそも妖怪を二分している研究状況自体を捉えなおす必要がある。例えば民俗学者の香川雅信は、江戸時代の都市文化において、畏怖の対象であった妖怪が娯楽へとつくりかえられたと主張し、民俗学・文学研究・美術史学などを分野横断的に用いてその経緯や背景を明らかにした。また、これらの分野に限らず、近年では歴史学でも怪異全般に関心が集まる中、妖怪概念史の研究が行われている。具体的には、現在用いられている妖怪概念が近代に形成されたという視点から、妖怪概念を時系列上に布置して理解しようという試みである。上記の通り、妖怪を取り上げる際には、多分野の研究の蓄積を俯瞰する必要があると生じていると言えよう。

**【海外における妖怪研究】** 妖怪と類似の存在は世界中でみられる。例えばイギリスやアイルランドでは古くから妖精 (fairy) 信仰が根付き、それに対する研究もさかんに行われてきた。

これらの地域では16世紀以来、民間伝承の収集や研究が進められてきた。なかでも19世紀の歴史学者であるトマス・カイトリーや20世紀の民俗学者であるキャサリン・ブリッグズは、妖精研究において重要な功績を残している。カイトリーの著作である『妖精の誕生—フェアリー神話学』(*The Fairy Mythology*) は各国の妖精伝承を収集した研究書で、妖精研究の嚆矢として広く読まれた。また、ブリッグズはシェイクスピア作品を中心とする文学の中の妖精を研究すると共に、従来の妖精研究の功績の整理や分類を行い、イギリスのフォークロア学会の会長を務めた。しかし、これらの研究が蓄積されながらも、個々の妖精の起源については諸説ある場合が多く、また分類方法についても決定的な答えは出されていない。妖精の分類としては、詩人として知られるウィリアム・バトラー・イェイツによるものが著名である。実際に妖精の存在を信じていた

彼は、生活形態に基づき、群れをなして暮らす妖精とひとり暮らしの妖精の二種類に分類した。

妖精研究もまた、民間伝承の中で語られてきた妖精を対象とする研究と、文学などフィクションの中で表現されてきた妖精を対象とする研究がある。妖怪研究と同じく、妖精研究においても後者に注目すべきとの指摘がされており、英文学者・井村君江は、文学や絵画、演劇などの表現方法によって形成された妖精像を研究する必要性を主張している。また、妖精研究ではキリスト教と妖精信仰の関係についても指摘がなされている。このような既存宗教との関係に着目する視点は、日本の妖怪研究でもいかしうるものであろう。

**[参考文献]**

井上円了『妖怪玄談』哲学書院，1887年（竹村牧夫監修『妖怪玄談』大東出版社，2011年）

井村君江『妖精学大全』東京書籍，2008年

香川雅信『江戸の妖怪革命』河出書房新社，2005年

菊地章太『妖怪学の祖 井上圓了』角川学芸出版，2013年

小松和彦『異人論』青土社，1985年

小松和彦編著『日本妖怪学大全』小学館，2003年

宮田登『妖怪の民俗学』岩波書店，1985年

Briggs, Katharine. *A Dictionary of Fairies: Hobgoblins, Brownies, Bogies and Other Supernatural Creatures* (London, Penguin Books Ltd, 1976). 平野敬一ほか訳『妖精事典』富山房，1992年

Keightley, Thomas. *The Fairy Mythology* (London, H. G. Bohn, 1850). 市場泰男訳『妖精の誕生—フェアリー神話学』社会思想社，1982年

国際日本文化研究センター「怪異・妖怪伝承データベース」, <http://www.nichibun.ac.jp/youkaidb/> (2014年12月1日取得)